鶴見俊輔と「私的な根」からの民主主義

Shunsuke　TSURUMI　and “Private-Roots” Democracy

木村倫幸
Tsuneyuki　KIMURA

一

思想家・鶴見俊輔の民主主義論に存在する「私的な根」は、彼の出発点であるとともに、その最後の拠りどころであることが、これまで指摘されてきた。そしてその「私的な根」の奥底にはまた「子どもの目」があり、これが「自分を分割して、今自分のいるところを別の人間の視点から見る」①視点であったこともわれわれの確認できるところである。

鶴見は、この視点から、戦後の日本社会に対して積極的な発言を続けてきたのであり、そのことは「ベ平連」（ベトナムに平和を！　市民連合）、「声なき声の会」、「自衛官人権ホットライン」等の運動における発言にも通じている。この視点は、政治的状況がどのように動こうが、強大な権力に抗する最後の砦として徹底して抵抗することを可能にするものであり、そしてまたこの奥底からの視点の見通す先には、近代社会そのものへの批判――それは、過去からの批判、未来からの批判、外からの批判等との多様な視点を可能にする――がつながっている。鶴見のこの視点がつながっている先をいくらかでも見通すのが、小論の目指すところである。

二

手がかりとして、例えば六〇年安保の時期に鶴見が語っている運動に対する姿勢を見てみよう。鶴見は、自分の運動の根拠についてこう述べている。

「この私の中の小さな私のさらに底にひそんでいる小さなものの中に、未来の社会のイメージがある。私が全体としてひずみをもっているとしても、分解してゆけば、ゆきつくはてに、みんなに通用する普遍的な価値がある。このような信頼が、私を、既成の社会、既成の歴史にたちむかわせる。国家にたいして頭をさげないということは、私が、国家以上に大きな国家連合とか、国際社会の権力をうしろにせおっているからでなく、私の中にたくみに底までくだってゆけば国家をも、世界国家をも批判し得る原理があるということへの信頼によっている」②。

「もっとも小さな私の中にひそむ可能性への信頼が、革命の思想の中にどう

しても入ってこなくてはならない前提であるように思う」（同）。

この、「もっとも小さな私の中にひそむ可能性への信頼」という原理から、鶴見は、「私的な根の上に日本の現実の国家機構を批判する思想」＝「私的な根から思想をとらえなおす」（九－一八〇）政府批判の思想を展開する。すなわち、思想の私的な根によって初めて、国家が押し寄せてくる力に対抗する根拠、「国家をも見かえす私というとらえ方」（九－一八二）が見出される。

そしてこの根拠とされるのが、「たとえ間違ったことをしても、私には彼ら国家指導者ほどの悪をなしえない」（九－二七一）ということであるとされる。というのも、「使えるカネの規模」と「使える物理的暴力の規模」との比較で、国家が保有するカネと権力については、われわれが圧倒的に劣っているからである。しかしそのことによって同時に、「私たちのほうが倫理的に優位に立っている」（九－二七二）ということも言いうるのである。何故ならば、「そのことによって私たちは、自由に国家指導者を批判できる立場にいる」（同）という自信を持つことができるからである。しかし実際の運動において「私」として国家権力に向かっていくときには、やはりこの「規模」の差が力を持っている事実も認めざるを得ない。

運動におけるこうした関係について鶴見は、次のように述べる。

「国家をどのようにして批判できるか。それは抽象的な問題ですが、それは具体的には、現政府がきめてしまったことを、根本から批判する力をどのようにして私たちは自分の中につくることができるか、という問題に集中的にあらわれます」（九－二八五）。

すなわち「私的な根」からの批判は、自分の中における抵抗力をいかにして形成するかという問題として立ち現れるのである。そしてこの形成の方法として、鶴見は、強力な国家権力に対する座り込み、断食という自分に可能な方法を提唱し、その裏づけを述べる。

「自分を無力な状態にして、権力に対して抗議するのは、無駄なようにも思え、矛盾を含んでいるようにも思える。たしかにそうだ。他にもっと有効な抗議の仕方をさがさなくてはならない。

それにしても、他の有効な方法が、地位を利用することであったり、団体の力を利用することであったり、有名人を利用することであったりすると、批判する相手の国家権力はもっと金があり、大きな組織があり、もっと地位と名声をもっている人をかかえているので、こちら側の有効性をうわまわる有効性をいつも、むこうがもっており、抗議することは無駄というふうにも考えられる。

そうすると、やはり、自分を一個の粗大ゴミとして道路の上におくという抗議の形は、根本の抗議の形として、大切なものに見えてくる。そういう抗議を、はだかの自分としてなし得るという自覚が、権力への抗議のもとにあるほうがいい。それがあって、その他に（いくぶんでも）有効な他の抗議の方法をさがすというようでありたい」（九－三〇二～三〇三）。

この姿勢は、彼の抵抗のスタイルとして一貫している。それ故鶴見がこれまで関わってきた運動には、最後のところでこのような自分の決断、行動を拠りどころにするという点で根強いものがあったし、またその範囲も、「べ平連」の大衆的広がりの時期でさえ、サークルの範囲を超えるものではなかったと言えよう。このことに対して、運動論からの限界という批判を加えることもできるが、しかしそれでもなお最後の拠点という視点については、それなりの意義を認めざるを得ないであろう。

三

小論の始めにも述べたように鶴見の視点は、近代社会の批判にあたって、「私的な根」に根拠を置きつつ、ここから国家権力に抵抗すると同時に、さらに過去・未来・外から批判する幅の広い視点とつながっている。

特に過去からの視点として持ち出されてくるのが、近代日本が形成される以前の、人と人との素朴なつながり、庶民の思想と言える人間関係であり、鶴見はこれを近年、「銭湯デモクラシー」という言葉で特徴づけて、明治国家滅亡後、改めて戦後民主主義の原点となったと説く。

「だって銭湯といえば、皆お互いが裸でしょ？　完全に無防備なのに、見知らぬ人が入ってきても、殴り合わないし、殺し合いにもならない。ひたすら一緒に湯につかり、しばらくすると出て行く。こういうルールが偉大な民主主義を育てる。『体験の中に根付いた憲法』といってもよろしい。それを私は『銭湯デモクラシー』と呼んでいます」③。

この民主主義は、「態度の民主主義」とされ、ヨーロッパに発する言葉による民主主義とは区別される。というのも、近代以前の農村社会を基礎とした日

本社会では、ヨーロッパのように敵を異端として断罪してしまうのではなく、たとえ敵対する相手を攻撃する場合でも、命まで奪い破滅にまで徹底的に追い詰めるというのではないという流儀が定着し、これが生活のルールとなったからであるとされる。

さらに鶴見は、銭湯の人生への効用を付け加える。

「銭湯では、お年寄も若者もいっしょくたに互いの裸をさらしますね。年を取ると、自分の体はどう変化していくのか、人生の喜怒哀楽を他人の裸から感じとるわけです。年配でも色っぽい人や入れ墨の鮮やかな女性、妊婦。世の中にはいろんな人がいることも実感できます。湯船に入る前にはかかり湯をし、お湯やせっけんの泡が周りに飛び散らないよう気をつける。世間のちょっとしたマナーを守ることで成立する庶民の楽園だと思います」（同）。

このような近代以前からの生活習慣に基づいた素朴なまでの人間関係の維持が、かえって近代社会が作り上げた制度の無理さ加減を照らし出す。鶴見は、過去からの視点をここに見出す。

四

この鶴見の視点は、翻って未来からの視点につながる。鶴見はかつて『絵葉書のすきまに』④という旅行記において、アイルランドの風景を、「空港から町へゆくバスの中から、地平線までひろがる野原を見た。木がまったくない。／岩が多く、その上に苔と低い草がはえ、遠くの丘は青ときいろのだんだら模様のビロードのように光っていた。／それは人間が死にたえたあとにひらけてくる風景のようだった」（一一―三四七～三四八）と表し、チェコのプラハの人形芝居の時計台を「一時間ごとに、がいこつが片手でつなをひき、もう一本の手が砂時計をひっくりかえして、鐘をならす。がいこつは、死の使者であり、時間の動きは、私たちが死に近づくことを知らせ、死者の立場から生者の動きを計っている。／（中略）／この人形芝居は、一時間ごとに、五〇〇年、このプラハでくりかえされてきた。プラハの人口が死にたえたとしても、時計の仕掛けがこわれないかぎり、芝居はつづくだろう。滅亡にむかって歩む現代文明を、この大時計は、宇宙の規模において、このように計っている」（一一―三八六）と語り、インドのベナレスにおける水浴する人びとについて感慨を「生きていることには意味がないということをさとるための道場として、この場所があるように思う。そういうふうにして身につけた無関心をとおって、ふたたび生に眼を向ける時に、ここに住む人たちのおだやかなまなざしがあらわれる」（一一―四八〇）と述べたことがあるが、それにつながる意味で、次のように「現代が煮詰まってきた」として、日本国家の滅亡を言う。そしてこれとは異なる次元を持つ、仏教の視点の重要さを強調する。

鶴見自身の監修による『平和人物大事典』（日本図書センター）刊行についての、道場親信からのインタビューにおいて、次のように述べる。

「正確に言えば日本国家なんだよ。日本国家は滅びます。だって変じゃないの、アメリカを昔は『鬼畜米英』なんて言ってたのに、今はアメリカに抱っこされて赤ん坊みたいに天真爛漫に威張っているんだから。（後略）

アメリカ化ってことで言えば、大正時代にもアメリカナイゼーションはあったんだよ。だけどそれは皮相の面で、農村までは行ってない。結局農村文化を掘り起こしたのは日本のファシズムで、それは大東亜戦争まで行くでしょう。そうすると、ほとんどアメリカ化は出てこないんだ。戦後になって、農村にまでアメリカ化が入っていく。そして、生活の仕草として日本全体の中でアメリカ化が煮つまってきた。農村から大臣までがそうなんだ。『煮つまってきている』というのは、そういうことです」。⑤

「アメリカの軍事力をもってすれば、人類そのものを滅ぼす力がある。日本もまたアメリカの手先になって、人類を滅ぼす力がある。そうすると、人類の歴史の終わりだね。そこから見ていく方がいいと思う。可能性としてそれを視野に入れて、人類史を見ていくというやり方があるんだ。仏教はそういうポテンシャルを含んでいる。寂滅為楽なんだから」（同）。

この中での、日本のファシズムが農村文化を掘り起こし戦争へと導いたという指摘は重要であるが、今はそのことは措くとして、アメリカの軍事力や日本の協力によって現在の人類が滅んでしまった後の視点から、現代という時代を見るということは、いわゆる現在と未来を通じた一貫したものとして見通すのではなく、滅んだ未来が現在を切り離して、他者として見るということである。これは、行き詰まりのニヒリズムではなく、近代社会批判のラディカルな視点として検討される必要がある。そしてこれに関連して想起すれば、鶴見は、前掲の著書のイギリスのストーンヘンジについての感慨を、こう述べている。

「いったい、これらの石が、おかれた時のままここにのこっているのだろうか。四〇〇〇年前の巨石の神殿は風化し、これらをつくった人びとの思いおよばなかった形になって今あるのではないか。そのことが、これらの巨石の独自の表現力になっているように思える」（一一―四〇八）。

「自分がくずれおちたあとを考えに入れて何かを数千年の後につたえることができるか。ピタゴラスの定理の証明のようなものを表現と呼ぶならば、そうも言えよう。しかし、自分の作品がくずれてゆくなりゆきをくりいれて、四〇〇〇年後に対して何かをうったえようとする人はいるだろうか」（同）。

鶴見がこのようにストーンヘンジを見る見方は、未来の何者かがわれわれの時代を見る見方に似てはいないだろうか。そしてこれは、キリスト教の立場とは異なり、仏教的立場に近いというのが鶴見の意見である。

五

さて過去と未来から近代社会を批判する視点を提唱した鶴見は、現代において、近代国家の外からの批判の視点を取り上げる。これは近代国家という枠組みを超えた問題として取り上げられる。鶴見はこのことを、アフガニスタンとパキスタンの国境地帯（ペシャワル）で医療と水源確保事業に取り組んでいる医師・中村哲との対談で指摘する。この対談で中村は、次のように述べる。

「中村：日本のような近代国家からは、イランや、アフガニスタン、パキスタンといった国があるように見えるが、これらはいわば疑似国家だ。民衆の間に国境はなく、ひと続きにつながって動いている。

アフガンから隣のパキスタンに逃れた難民は現在三〇〇万人。日本がこれだけの難民を受け入れられるだろうか。国境を超えた相互扶助や暗黙の合意がある」。⑥

この中村の意見に、鶴見は答える。

「鶴見：民族は国家ができる前から存在した。中国文学者の竹内好（一九一〇～七七）が北京に暮らして衝撃を受けるのが、国家機構と無関係に生きている中国民衆の存在だった。

そこから加々美光行・愛知大教授は『有根のナショナリズム』という考え方を引き出した。国家を超える、民衆に根っこのあるナショナリズムだ。国家をつくる力を持つかもしれないが、国家機構に支えられてはいないナショナリズムだ。イスラム圏にはそれがある。ところが欧米は、近代国家の型をイスラム圏におしつけてみて誤解している。日本もそれを踏襲している」（同）。

鶴見は、このような「有根のナショナリズム」はかつての日本にも存在した、明治国家を作った人びとにはそれが見られると言う。（もっとも、「明治国家を作った力が偉大なのであって、これを明治が偉大だとすりかえると問題がある」（同）と釘を刺すが。）そして現在においては、この「民衆に根っこのあるナショナリズム」ということに戻って考えてみることが、将来に向けて運動を持続できる重要な要素であることを強調する。

これに関連して鶴見は、彼自身の戦争中の体験――軍施設の擬装植物を書いたパンフレットが、農家出身の多かった兵士から喜ばれたという体験――を振り返ってみて、そういう植物を育てる技能の共有があったからだと、民衆が持つ「共有」を指摘する。そして中村からの、「根っこのあるナショナリズムもそれに近い何かがあるんでしょう。意識せずに人が共有できる何かが」（同）という問いかけに対して、運動の基底に触れるものとして、次のように語る。

「大切なのはマニュアルではなく、自分の身についた行為である『しぐさ』『作法』を共有し、伝承することだ。大岡昌平（〇九～八八年）の小説『俘虜記』の主人公の日本軍兵士は米兵を見たが、撃たないと決めた。兵士の作法としては間違いだが、人間の作法に戻っている。『人を殺さない』というしぐさはずっと続く。そこに戻らないと今の状況は抜けられない」（同）。

こうして鶴見は、ここにまた「しぐさ」「作法」の共有ということで、「私的な根」に通じる視点を見出すのであるが、これはまた最初に戻って、「この私の中の小さな私のさらに底にひそんでいる小さなもの」の中に、「みんなに通用する普遍的な価値」があることを再確認することになる。

六

鶴見は自身の体験として、右記の大岡の態度に通じる事柄を岩波ブックレット『憲法九条、いまこそ旬』⑦において次のように語る。

それは鶴見が戦時中に軍属としてジャカルタに配属されていた時の出来事である。海軍の水雷船隊がオーストラリアの商船を攻撃した時に捉えられた捕虜

の処置について、鶴見たちに次の命令が下った。長くなるが、以下、当ブックレットから引用する。

「それで、命令が下った。ひとつの部屋を分けているのですが、私の隣の部屋に、そこのもう一人軍属がいたのです。偶然そっちに命令が下ったのです。どういう命令かというと、日本の軍人に分ける薬さえ足りないのだから、病気になったものは毒薬を与えて殺せというのです。捕虜はポルトガル領ゴアに住む黒人だった」。

「それを殺す役割は、部屋を分けて私の隣にいる軍属に当たったのです。彼は行って帰ってきて『じつに嫌なことだった』と言っていた。その黒人は病院に入れてくれると思って拝んでいる。薬は療養の薬だと思っているが、これが毒薬なのです。それで、埋めるところに行ったら、もう穴が掘ってある。そこに入れたけれども、死なないので、与えられたピストルで撃ったら、グーグーいっていた、それが耳に焼きついているというのです」。

「命令が彼に下り、私に下らなかったのは偶然です。だけど、その偶然をありがたがって、それで自分は戦争中一人も人を殺さなかったといって喜んでいるわけにはいきません。ここに哲学的な問題があるのです。自分にもし命令が下ったら、自分はどうしたか。これは科学上の問題ではありませんよ。だけど、そういう哲学上の問題を避けることはできません」。

鶴見はここで、「人を殺す」という自分に向けられた問にどう答えるかという問題を提起している。もちろん「国家をも見かえす私というとらえ方」という点から言えば、断固拒否するという可能性もないではない。しかしその状況下に置かれた個人として、果たして可能であるのかという深刻な問題は問い続けられる。鶴見はその後のことを、こう語る。

「命令がもし私に下ったとすれば、その恐怖感に負けて、屈して、殺したかもしれない。それは実現しなかったのですから、それは問題はないとはいえるのですが、哲学というものはそういうものじゃないです。私が戦後、何年も何年もかかってようやく達した結論は、もし私が屈して殺していたとしたら、『私は殺した、だが、殺すことはよくない』と一息で言えるような人間になりたい」。

ここに曖昧さを見るか、苦悩を見るかは、意見の分かれるところである。いずれの結論を採用するにせよ、後味の悪さは残る。この結論で鶴見を批判することももちろん可能である。しかしここにあるのは、建前によって予め整合的に構築された思想ではなく、状況によって動揺する自分を動揺として受け止め、そこから行動を考えていく思想であることを確認しなければなるまい。鶴見は、「思想は信念と態度の複合」⑧であるとして「信念と結びついている態度」(同)の重要性を強調するが、そのような思想の形が、この場面に凝縮されていると言えよう。

「私は殺した、だが、人を殺すことはよくない」と一息で言えるようでありたいという鶴見の発言の背景に、われわれは、鶴見の一定の結論を見ることができるが、この自己の内部に分裂、屈折した意識を支えるものとして、「私的な根」、「自分を分割して、今自分のいるところを別の人間の視点から見る目」への絶えざる回帰を見ることが、鶴見の思想の本質により迫る道筋であるように思われる。

以上、鶴見の「私的な根」のつながっていく先が近代社会の批判であり、これを、過去、未来、外から批判するところであることを確認した。そしてまた、そのつながっていく更なる先が、より深いところの「私的な根」にあるらしいことも見えてきたようである。鶴見は、このことを「神話的時間」⑨という言い方で示唆しているが、「私的な根」と「神話的時間」との解明は今後のさらなる課題として残される。

註

① 『鶴見俊輔集―一〇　日常生活の思想』(筑摩書房、一九九二年)七九ページ。

② 『鶴見俊輔集―九　方法としてのアナキズム』(筑摩書房、一九九一年)一七七ページ。
以下本書からの引用は、(九―一七七)等と表記する。

③ 朝日新聞、二〇〇六年一月六日、夕刊。

④ 「絵葉書の余白に――文化のすきまを旅する」(『鶴見俊輔集―一一　外からのまなざし』所収、筑摩書房、一九九一年)。以下本書からの引用は(一一―三四七～三四八)等と表記する。

⑤ 週刊　読書人、二〇〇六年八月二五日。

⑥　朝日新聞、二〇〇六年一一月二八日。

⑦　『憲法九条、いまこそ旬』（岩波ブックレットNo. 六三九、二〇〇四年十一月）五五～五六ページ。

⑧　『鶴見俊輔集―八　私の地平線の上に』（筑摩書房、一九九一年）二五三ページ。

⑨　『神話とのつながり』、鶴見俊輔・西成彦・神沢利子著、熊本子どもの本の研究会出版部、一九九七年）参照。